

ティーチング・アシスタントの効果的な活用法

G. W. フライ *Gerald W. Fry*

ミネソタ大学

司会：それでは、時間になりましたので、名古屋大学大学院文学研究科の教育研究推進室と学務委員会の主催によるFD研修を始めたいと思います。開会にあたりまして、町田研究科長にご挨拶をお願いします。

町田：皆さん、お忙しいところ、おいでいただきありがとうございます。今日は司会の周藤先生からお話がありましたとおり、教育研究推進室と学務委員会の共催ということで、われわれが「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択をきっかけに、年間を通してなるべく盛んにやろうとしているファカルティ・デベロップメントが実現したことを大変うれしく思いますし、ご協力に感謝いたします。本日のテーマはTAの活用ということで、ミネソタ大学のジェラルド・フライ教授にご講演をお願いしております。フライ教授は高等教育研究センターの客員教授でもいらっしまして、教育発達学および比較教育学のご専門ということで、教育に関して有益な話をうかがえるものと期待しております。また、先生はアジア諸国の教育事情

にも大変にお詳しいということで、参考になるお話が多々あるかと思えます。今日は高等教育研究センターの鳥居先生にもおこしいただいております、コメントをいただけるということで、どうもありがとうございました。講演の後で、有益かつ活発な討論が実現することを期待しております。簡単ですが、私の挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。

司会：ありがとうございます。講演の前に、ご承知の方も多いかと思いますが、同時通訳システムについて説明いたします。こちらにありますように、お手元のイヤホンの1のほうにさせていただきますと日本語が、2にさせていただくと英語が聞こえます。実際にどちらの言語で話されていても、必ず選択した言語が聞こえる仕組みになっています。このようなシステムを導入しておりますので、是非英語で話したいという方もおありでしょうが、今日は基本的には日本語で進めていくことにしたいと思います。宜しく願いいたします。

フライ：このような機会を与えていただきましてありがとうございます。私の考えを皆さんと共有できずことを大変うれしく思っています。最初に、ご了解をお願いします。私は、TAに関してシステムティックに研究をしているわけではありません。しかしながら、過去40年間、私は高等教育の場におきまして研究を重ねてきました。そして多くのTAを使って、TAをどのように活用すればいいかという点について、豊富な経験をつんできております。最初にご紹介したいのが、私の大好きなブッダ、お釈迦様の経典の一節です。お釈迦様はすばらしい教師だと思います。多くの人々、特に西洋の人々はアジアの教育を、ただ覚えろ覚えろ覚えろというばかりだといって批判しますが、お釈迦様の教えを見てみましょう。お釈迦様は、自分の経験から物事を批判的に評価しなければいけないと教えています。2500年前の話です。アメリカでジョン・デューイのような学者が言うずっと前に、このよ

うなとても進歩的な教育がアジアで行なわれていたのです。もうひとつの引用をご紹介します。これも私が好きな引用です。この原則に従って私は教えたい



のです。この引用はベンジャミン・フランクリンですが、ベンジャミン・フランクリンの考え方もまた、古代アジアの知恵から影響を受けているようです。おそらく孔子か孟子だと思のですが、どなたか出典をご存知でしたら教えてください。

さて、プレゼンテーションに入る前に、皆さんに質問があります。日本で大学院生だったときに、あるいはアメリカやヨーロッパに大学院生として留学したときに、TAとして働かれた経験のある方、手を挙げてください。何人くらい、いらっしゃいますか。2人だけですか。では、これまでに何らかのかたちでTAを使って授業をしたことのある方、手を挙げてください。多くの方がTAを使っていらっしゃいますね。しかしながら、自身でTAをやったことがないという方が多いようです。私は二度目の大学院生のときにTAをやったことがあります。オフィスもシェアさせてもらいました。なんて優しい先生なんだろうと思ったものです。まあ、彼は雑用が嫌いだったので、私がいつもオフィスにいる方が都合が良かったのですが。ともあれ、私にとっては良い経験でした。

このスライドですけれども、TAを使う上での4つの重要な問題を要約してあります。そこには、2つの次元があります。第1に、私たちが非常によい教育者、あるいは研究者であるために、TAが支援してくれること。これが一番大切なことです。しかしながら、他方では、TAも自分が将来優れた教師になれるよう成長しなければなりません。そのために経験をつんでもらわないといけません。これはとても大事な点で、彼らを優れた教員にするにはどうしたらいいのかを、考えていかなければなりません。

日本語が非常に優れているのは、漢字が存在することです。漢字は、とても意味が豊かですね。ここに「危機」という漢字があります。英語で危機というのはcrisisですけれども、crisisはcrisisに過ぎません。ところが、「危機」という漢字の上の字は、危ないという意味ですが、下の機というのはopportunity、つまり機会のことです。ですから、どんな危機でも、良い機会に転じることができるのです。だから、私は日本語が好きなのです。英語ではこのような表現はできません。

しかしながら、TAを使うことに文字通りの危機があることは事実です。そこで、アメリカの場合を例に、その危機の要素を見ていきたいと思います。皆さんもご存知の通り、アメリカの大規模な研究大学では、ティーチングアシスタントが、経済学入門とか、

微分積分などの普通の授業を担当しています。彼らは、しばしば中国や韓国から来た留学生です。名古屋大学に来てから多くの学生と会いましたが、名古屋大学の1年生でTAに微分積分を教わっているような学生はいませんよね。皆、ちゃんとした先生から教わっているはずですよ。アメリカの研究大学でも、プリンストンだけは授業にTAを使っていません。プリンストンでは、学生は本当の教授について学ぶべきだと考えているのです。その代わりに、大学院生に対してはフェローシップという制度があり、RAとして収入を得ることもできます。しかし、プリンストンの学部生がティーチングアシスタントから教わることはありません。プリンストンは、そうやって卓越性を獲得しているのです。しかしながら、アメリカの他の多くの大学では、学部の多くの授業をTAが教えています。何と言っても、正規の教授を雇用するよりも、ずっとずっと安上がりですから。

また、こういった問題もあります。TAになった学生は、教授と親しく接することができるばかりか、それによって収入を得ることができます。一方で、TAになれなかった学生は、このような機会に恵まれないので、システム上の不公平の問題が生じてしまいます。日本の教育制度では、平等性が重視されています。ビル・カミングの本を読むと、日本の教育制度では教育の機会の平等が保たれていることが分かります。

さて、ティーチングアシスタントには、さまざまな役割が期待されています。もっとも単純なものとしては、教授のためにコピーをしたり、図書館に行ったり、小さな仕事をするといった、とくに頭を使わないような仕事があります。一方では、成績をつけるような仕事もあります。アメリカでは多くのTAが成績をつける手伝いをしているのです。個人的には、それが好きではありません。学生がどれだけ学んだかを知り、それを授業にフィードバックするためにも、自分の学生の成績は自分でつけたいと思うからです。オレゴンにいたとき、私が雇用したTAは、すべてインターナショナル・スチューデント、つまり外国から来た学生でした。そのような学生がグレーディング、つまりアメリカ人の学生が書いた論文あるいはレポートの成績をつけるのは、語学的な面でも難しいことです。ですから、TAに成績をつけさせるというのは問題だと思います。

TAの役割は、他にもあります。TAを雇用していても、授業を担当させたり成績をつけさせたりしたくなく

いと考えるなら、TA が研究者として成長してくれるよう、研究をやらせることになるでしょう。あるいは、授業の改善に役立つような研究をさせるかもしれませんが。私の同僚にデイヴィッド・チャップマンという教授がありますが、彼はウズベキスタン、ウクライナ、ポーランドなどによく旅行しています。彼のところには、彼がキャンパスから離れている間、彼の代わりにしてくれる TA がいます。この場合、TA は授業の共同担当者ということになります。TA がインフォーマントの役割を担うのはとても有効です。たとえば、あなたの学生がアラビア語やスワヒリ語やベトナム語を学びたいと思っているとしましょう。ところが、あなたの大学にはアラビア語やベトナム語、スワヒリ語の授業がありません。その場合、留学生を TA として使うことで、その言語を教えることができます。たとえば、昨日の夜、中国出身の名古屋大学の留学生が、日本人の女子学生にとっても上手に中国語の発音を教えているのを目にしました。実際、それはとても良い授業でした。ですから、語学の学習という点では、TA はとても役に立ちます。私の大学にも日本語教育のプログラムがありますが、小さなディスカッションのクラスは、すべて日本人留学生が行っています。彼らは、日本語でのコミュニケーションをとっても上手に教えています。

3つ目の役割ですが、これも非常に役に立つ TA の使い方です。大学が高校や中学をサポートをするときに TA を使うのです。私がオレゴン大学にいたとき、中学校で東南アジアのメコン川流域に関する学際的な教育研究プログラムを実施するにあたり、私たちの大学院生がとても役に立ちました。彼らは、中学生を教えることを通じて、貴重な経験を積むことができました。私達の大学には、このような科学プロジェクトがあり、公立学校の科学の水準を高める上で、TA が役に立っています。

TA はまた、大学の教授に対して授業の様子をフィードバックすることができます。これは、将来的に TA の重要な役割になっていくと思います。経験のある教授の下で、TA が新しいコースを作って教える。そういうこともできるかもしれませんが。これからお話しするようなことは、日本では起こらないことを願っていますが、教授が TA を不適切な形で利用することがアメリカではときどき起こります。子どものベビーシッターをさせたりとか、パーティ用のワインを買いに行かせたりとか、郵便局に行かせたりとか、そういう個人的なことを TA にさせるのです。これは非常に

よくないことで頭痛の種です。日本はきちんとした国ですから、このような問題が起こらないよう願っていますが。

TA に関しては、まだいくつも重要な問題があります。いくら支給するかという報酬の問題も、なかなか複雑です。日本では TA の報酬が低いという問題があるようです。アメリカも非常に低いです。しかし、フルタイムで TA や RA をやっていたら授業料が免除されるということもあります。スタンフォードやハーバードは非常に学費が高いため、授業料が免除されるというのは、学生にとってはとてもありがたいことです。しかし、大学は給料が非常に安い TA に頼り過ぎているという批判もあります。微分積分を TA に教えさせれば、教授を雇うよりもずっと安くあがりますからね。実際、留学生を TA に採用することには、批判が高まっています。保護者の間には、高等教育を改革しようという大きな動きがあって、高い授業料を払っているのに、教えているのは外国人の TA で、何を言っているのかも分からないというのです。想像してみてください。あなたが大学1年生で数学を勉強しようとしている。でも、授業を担当する TA は教え方を理解していない上に言葉の壁もある。これは、本当に難しく複雑な状況です。

私は自分のことを国際人だと思っています。ですから、留学生の TA も好きです。オレゴンにいたときには留学生ばかり TA に雇っていました。アメリカ人を雇ったことはありません。思うのですが、スタンフォード大学の前の学長のドナルド・ケネディさんが提案したように、すべての TA と将来大学の教員になるようとしている学生のために、学際的なセミナーを行ってはどうでしょうか。このセミナーの一部として、TA や大学院生は、もっとも素晴らしい先生の授業を見学すべきだと思います。これは実際には行われていません。スタンフォードでも東大でもチェコのカレル大学でも、このようなセミナーは行われていません。でも、現に素晴らしい先生がいるのですから、なぜその先生が素晴らしいのかを学ぶべきです。ですから、素晴らしい先生の授業を見学して、その教授法を批判的に吸収する、という試みを今後やっていくべきだと思います。今行なわれていないのが不思議なくらいです。素晴らしい先生がやっていることに注目していないわけですからね。

倫理の問題もとても重要です。アメリカでは教育研究上、倫理をめぐる非常に複雑な問題が起きています。なかには、自己盗作という問題まであります。昨

年私達の大学で、自分の作品を盗用、つまり誇大に見せたために、テニユアを得られなかったという事件がありました。日本でも、学生たちから研究を盗用されたと訴えられた教授が解雇されるというトラブルがあったと聞いています。学生たちには、こうした問題を本当に深刻に考えてほしいと思います。特定の文化を批判するわけではありませんが、たとえば私がベトナム語で書かれた研究を盗用して日本語や英語で発表したとします。いったい誰が、私が盗用していることに気がつくでしょうか。ベトナムにも素晴らしい研究があるのです。でも、元がベトナム語だと、それをチェックする機能が働かないのです。というわけで、盗用をめぐるっては、いろいろ複雑な問題があります。

また研究と教育の関係についても、真剣に考え直してみる必要があります。セミナーの案を考えてみました。もちろん、名古屋でやるなら、名古屋大学のニーズに合わせて変更が必要でしょう。ニューヨーク大学の物理学の教授だったアラン・ソーコルのことをご存知ですか。とても興味深い話なのですが、彼は権威あるデューク大学の雑誌に載せるために、内容はまったくナンセンスながら大げさな単語をちりばめ500にも及ぶ注のついた論文を投稿したのです。ところが、この「論文」が、大まじめに公刊されてしまいました。そこで彼は、ニューヨーク・タイムズに、真相を暴露しました。こうすることで、彼は意味がなく役にも立たない研究に没頭する同僚たちを批判したのです。ですから、TAには、研究の内容と価値をよく理解させなければいけません。というのも、このようなトラブルは学界の信用を失墜させ、大学の名声を損なうからです。

さて、この四面体には4つの鍵となる要素を示しています。素晴らしいTAが持つべき4つの要素には、倫理的な面と自分の研究分野についての知識、そして教授法が含まれます。アメリカばかりでなく、日本でも多様化が進んでいます。ジョン・リーが『多民族国家日本』という素晴らしい本を書いています。最近、豊田市を訪れましたが、そこには大きな日系ブラジル人のコミュニティがあります。日本も多様性を持つ国になってきているのです。ですから、TAや将来の教員は、多様性をうまく扱う能力を身につけていなければなりません。

経済の停滞と少子化を見据えるならば、日本の国公立大学及び私立大学にとって、定員を充足するために、中国や東南アジアなどの国々からますます多くの学生を引きつけることが大切になってきます。

皆さんから、事前にくいつかの素晴らしい質問をいただいています。それに対する回答を一所懸命に考えてみました。1つ目ですけれども、日本の優秀な大学院生にTAになりたいという意欲をかき立てるにはどうすればいいのかという質問がありました。十分な見返りがなければ、誰もTAを引き受けようとは思いません。ですから、TAをすることで、素晴らしい教員や研究者になるための機会が得られないといけません。単にコピーをさせるとかつまらない仕事をさせる、そういうTAなら、誰も関心を持たないと思います。先ほど開催を提案した学際的なセミナーも、彼らが将来優れた大学教員になるためのトレーニングの機会を与えてくれると思います。

私たちは、さまざまな領域の学生が参加する特別な学際的なセミナーを開催しなくてははいけません。また、徒弟制度というものも非常に重要です。ドイツや、日本、ブラジルには徒弟制度の長い歴史がありますが、優れた教員は学生たちに良い機会を与えることができるでしょうし、日本の「先輩・後輩システム」とも矛盾しません。

次は、とても複雑な質問です。私たちの仕事を補助してくれるTAの存在が、逆に私たちにとって負担になってしまうという問題です。確かに、彼らは授業の準備を手伝ったり、非常勤講師として授業を担当したりしてくれる。しかし、彼らに対応するために、私たちも時間を費やすことを余儀なくされます。これは、本当に困った問題です。でも、彼らが助けとなることも事実です。映画論をやっている同僚は、授業で使うフィルムの編集をTAにやってもらっています。これはとても時間がかかる大変な仕事です。でも、TAはこの仕事を通じて教員の右腕になるばかりか編集作業に熟達することができ、教員の方は編集に必要な時間を節約することができるのです。

奨学金をもらっているようなものだから、あまり仕事をしなくてもいいと考えているTAもいるという質問もありました。そんなことにならないように、年度の初めにすべてのTAを対象とするオリエンテーションミーティングを行っています。そのオリエンテーションで、TAにどのような役割が期待されているかということを説明するわけですが、高等教育研究センターの夏目先生に伺ったのですが、こういうとき、フランスでは契約という概念が強調されます。日本では信頼関係が大事ですから、日本式ではないかもしれませんが、しかし、TAの職務を明確にするためには、このような方法も一考に値すると思います。

また、制度面での問題ですが、名古屋大学にもいろいろな研究科や学部があるわけで、あまりに厳格に同じ規則を押しつけることには私は反対です。それでは、フレキシビリティがなくなってしまいます。その代わりに、もう少し一般的な申し合わせをしておいてはどうでしょうか。たとえば、アメリカでは、時間数がきわめて明確に定められているのが普通です。ミネソタ大学でフルタイムのTAを務める場合、週に20時間を担当します。パートタイムの場合は、1週間に10時間と決まっています。もちろん、私が忙しかったり、逆にTAの学生が試験を受けなければならなかったりする場合には、調整が必要になります。それでも1週間に10時間のTAであれば1学期に150時間、フルタイムなら300時間を担当するという原則に変わりはありません。しかし、それ以上厳格な規則を設けるのはどうでしょうか。物理学と経済学は違いますし、経済学と日本語学も違います。言語教育におけるTAの利用法と物理学におけるそれとでは、まったく異なっているはずですが。その違いというものを、しっかり認識しておくことが大事ですね。

次は、TAに研究室事務をさせることについてです。率直に言って、私達の大学でも、学生にオフィスワークを担当してもらったことがあります。そこで何が起こったかご説明しましょう。TAがコピーをとったりしている間、事務で働いている人たちはおしゃべりをしていました。TAというのは、事務の人たちのためにあるわけではありません。私たちがよりよい教師になり、また彼らにもそうなるのがTAの趣

旨なのです。大学の中心は、あくまで教授と学生です。ですから、私は事務職員の仕事をTAがすることには賛成できません。しかし、学会やシンポジウムの準備などは別です。これはとても時間をとられますが、こういった仕事や助成金の申請書類を書くといった仕事は、TAにふさわしいと思います。この点は、まじめな検討に値します。

アメリカではTAの雇用にとっても熱心ですが、それは学生を大学に引きつける手段となっているからです。大学院生に予算を割かなければ、彼らはどこか他の大学に行ってしまいますからね。これはきわめて重要な問題です。というのも、日本の大学もそうだと思いますが、近年ますます部局レベルでの財政の自律性が求められるようになっていきます。つまり、TAを雇用するお金を研究費や旅費、人件費に振り向けることも可能なのです。ですから、本当にどれだけのTAが必要なのか、彼らのためにどれだけの予算を割くのかということ、真剣に考えていかなければなりません。

私の話を終えるにあたって、皆さんにはもう一度この困難な挑戦について考えていただきたいと思います。つまり、どうすれば私たち教員にとってベストな形でTAを使うことができるのか、どうすればTAたちが将来優れた教員になることができるのか、という点についてです。ご清聴ありがとうございました。皆さんとTAについて考えるこのような機会がいただけたことを心から感謝しています。

司会：フライ先生、どうもありがとうございました。次に、今日はせっかく高等教育研究センターの鳥居先生にいらしていただいておりますので、まずは鳥居先生から今のフライ先生のお話を聞いてのコメントを手短にいただければと思います。よろしくおねがいします。

鳥居：フライ先生、ありがとうございました。また、今日は文学研究科の教育研究推進室ワークショップにお招きいただき、ありがとうございます。私の方から簡単に、二、三補足をさせていただきたいと思えます。今日はアメリカでのTAのお話を中心だったんですけれども、アメリカでのTAをめぐる状況の変化について少しお話したいと思えます。もともと先生方もご存知のように、アメリカでは高等教育の大衆化が進んでいまして、研究重点大学においては、いかに

プロフェッサーたちのティーチング・ロード、いわゆる教育の「負担」、私はかっこつきで「負担」と申し上げますけど、ティーチング・ロードを減らすかという関心から、TAの採用が増えてきたという背景がご



ざいます。ただそうは申しまして、昨今アメリカの大学もティーチングの質、qualityをいかに担保するかということが非常に大きな社会問題になっていまして、教育経験があまりないTAに学部の学生のクラスを沢山もたせるのはいかになものかという、そういった議論ができたこともひとつの流れになっているかと思えます。例えばフライ先生の話の中でできましてハーバード大学では、ティーチング・フェローというふうに特別な呼び方がされているのですが、彼らは大体半期で80万円から90万円相当の給与を得ております。それ自体はさほど高額ではないんですが、ご紹介がありましたとおり、授業料が免除されるという非常に厚待遇になっております。また、州立の大学でも、ミシガン大学という大規模な研究大学がありますが、ここではグラデュエイト・ステューデント・インストラクター、GSIと呼ばれていますが、同じように授業料は免除されて、それなりの報酬が得られるということです。そういう身分が報酬的にしっかりと担保されていますので、TAになりたいという大学院生は非常に多く競争率も高いという状況になっています。その一方で、大学院生のTAをどう位置づけるかによって、彼らに対する仕事の提供と期待される資質が変わってきているというのもまた事実です。と申しますのも先ほどのフライ先生の話の最後にありましたように、彼らを将来の大学教員としてみなすという観点が最近非常に強まっております。と申しますのはハーバードとかミシガン大学とか、あとシアトルにありますワシントン大学といった研究重点大学の卒業生であっても、必ずしもすべての卒業生が研究大学に就職できるとは限らないわけです。その多くがむしろ教育重点大学のほうにポストを得ていくということを確認しまして、大学側としては早い時機から教育経験を身につけさせるといったプログラムを開発しております。それはプリペアリング・フューチャー・ファカルティ、PFFというプログラムで最近盛んに開発されてきておりますが、日本でも今後助教の問題がありまして、大学院生を終えてすぐに助手、あるいは助教につく際に教育経験というのが重視されてきています。今後大学院生のTAの職務を、単なる授業補助、それから教授の補助業務と位置づけるのか、あるいはTAを将来のわれわれの同僚としてみなすのかによって、どのような働きかけが必要かというのは組織的な課題になるかなというふうに思います。

司会：鳥居先生どうもありがとうございました。参加されている方にはメールであらかじめお伝えしてあ

りますけれども、どうしてもFDの場合では、例えばアメリカの仕組みはこうなっていますよという話をふんふんと聞いて、それはアメリカだからできるんだよと終わってしまいがちなんですけれども、今日は、こういうシステムを導入して、なるべくわれわれ同士のディスカッションも行っていきたく思いますので、よろしくご協力をお願いします。また、もうお気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、先ほどのフライ先生の講演の最後の方に追加の質問というのがいくつかありましたけれども、あれは皆さんからいただいた質問を私の方で要約して先生の方にお伝えしたものです。そこで、それぞれの論点についてもっと詳しく聞きたいという方もおありかと思えますけれども、まずは、われわれがTAを実際にどういうふうな形で使っているのかという点について、3人の方に事例報告をしていただきます。初めは日本語学の宮地さんのほうから事例報告をお願いします。

宮地：日本語学の宮地です。事例報告をということ、あまり特別な話はできないんですけれども、日本語学研究室でというよりは、私が自分の授業でTAをどのように活用しているかという観点でご報告いたします。紙の資料をお配りしていますが、右側半分は授業の簡単な紹介を兼ねてシラバスから抜粋した参考資料です。で、お話しするのは左側の簡単なメモ程度の内容ですので、その点ご了承ください。

どのようにしているのかということですが、大きく分けて、TAの活用の仕方には2つあります。ひとつは演習の科目で、日本語学の場合は3年生以上の学生が主に演習を受講しているんですけれども、それらの授業に1名ずつという格好で、なるべく内部の進学のみの方ですとか、あるいはM2以上でも専門とか時代が近い方、例えば中世語を扱うような授業でしたら中世語を専門としている院生という形で、なるべく専門の近い方をその授業のTAにお願いする形にしています。今、内部進学者をとということを行ったんですけれども、それは演習の科目というのが、その次のところで古今和歌集遠鏡研究という授業科目を出していますが、学部と大学院との合同の演習が多いためです。学部から内部進学である方というのは、その授業を学部のときにとっていて事情をよくわかっているため、大学院生としてTAにあたってもらっているということがあります。この古今和歌集遠鏡という江戸時代の文献を使った演習をとりあげてお話ししますと、はじめのガイダンスのときには、もちろん私が授業担当者ということで、どのような目的でどのような



作業を具体的に行う演習なのかということの説明しますが、そのあと第1回目の演習の発表をTAに担当してもらっています。それは、具体的な実践の中で、演習をどうやるかということのケース

スタディという側面もありますし、学部生というのは不慣れですので、専門の演習はどうやってやるのかということを実際に目で見て、そのお手本を示してもらっているのです。もっと具体的に申し上げますと、使用するテキスト、定本というふうな言い方をしますが、その扱い方ですとか。もっと基本的なことになりますけど、レジュメの作り方、資料の作り方、それから参考文献とか活用すべき辞典とか辞書類の紹介、使い方、それらがある場所も含めてですが、それらについてもTAの発表を通じて知ってもらわねえです。それから、日本語学の演習では、単なる講読ではなく演習ということで、使用するテキストの自分の担当した箇所のところから自分で問題を設定して、それに対して根拠となるようなデータを挙げ、自分で問題に関して仮説を立てて、報告をするというところまでを求めているんですけども、そういう部分での問題設定の仕方、何を問題にしたらいいかわからないというようなことが3年生になったばかりの人には大きな問題ですので、その部分に関してもお手本を示してもらっています。2回目以降は、学部の学生たちが実際に発表していくこととなりますが、単にお手本を示すということだけではなく、準備の段階からアドバイスをし、問題設定の仕方に関しても相談のり、ではどうしようかという形で、ケアをするということをしています。2回目3回目以降の授業では、具体的に担当者が自分で資料を作って、それを発表して討論するという形になるんですけども、TAの毎回の授業時の役割としましては、授業担当と共に、その質疑や議論のコントロールをするということですか、議論の最中に必要な、ではここをもっと調べてみようかなどというときには、その場で参考文献などを出してきて、調べてみるという作業を授業中にもやるわけですけども、そういうふうなことを率先して行うとか、アドバイスをするとかいうようなことをしてもらっています。そういう意味では、演習のような実践的で、専門性の高い授業科目において必要な基礎的な

スキルのオリエンテーションの部分とトレーニングの部分でTAの方に相当ケアしてもらっているというような格好です。先ほど、研究拠点大学というようなことも話題に出ましたが、従来は大学の学習とか研究においては、調べ方とか本の使い方とか探し方とか発表や質疑の仕方とかそういったものというのは、一方では当然身につけているべきものとか、自然とそのうち身につけていくものとか、そのような位置づけだったと思うんですけども、だんだん先輩から自然に伝授されるタイプのものというふうな、位置づけられるようになってきたと思います。ただし、そういう部分のスキルトレーニングというのは、名古屋大学では授業科目として設定しづらかったし、されてこなかったのが事実です。またそういうスキルに対して、教員の側も学生が自然に身に付けていくものだという理解でしたから、それを教えるというノウハウももちろんないですし、必要性も感じていなかったと思います。名古屋大学の場合ですと、1年生向けの基礎セミナー、それから2年生向けに基礎的な演習の科目を設定している研究室も多くあると思うんですけども、日本語学の場合には、2年生向けに基礎的な演習を設定するということはできていません。それで3年生になって専門的な演習にすぐ入ることになるんですけども、その間を埋めるといいますか、そういう役割がTAに課されていて、そのような仕事をお願いしているような格好になっていると思います。その意味で、私の演習の場合には、これをすごくわずかな資金なんですけれども、その資金的裏づけの元に責任を持っておこなっていただいています。

それから2つ目ですけども、これは非常勤の方の授業科目です。これは講義も含みます。集中講義なども含みますけれども、そういったものに各1名のTAをお願いしています。これは具体的には資料の印刷ですとか、教室でのマイクやプロジェクターなどの設備の調整ですとか、あるいは急に参考文献が必要だということに対応していただくということも含めて、細かいところへの対応、これは研究室のスタッフですとか、大学の事務の教務の方では対応が難しいという部分の側面の授業の準備などに責任を負ってもらっています。先ほども責任と言いましたが、それは大学院生も沢山いますけれども、今は制度上、助手の方も研究室の助手というような位置づけではなくなくなっていますので、もちろんスタッフがやればいいんですけども、なかなか手が回らないので、TAという制度を利用して不十分な部分のケアをお願いしているという格好になり

ます。これは本来的な活用とはちょっと違うかもしれないんですけども、現状ではそうしているということです。先ほど TA をやりたいと思わせるためには魅力が必要だというような話題がでましたけれども、すぐ金額が小さいということもあって、大学院生の中にも TA は面倒だということで、やりたくないという方も沢山いますし、非常に無責任な状態になってしまいがちなので、そこを非常に額が少なくして申し訳ないんですけども、ということをお願いしながら、仕事をお願いしているという現状があります。

個人的なことで、所見というようなことも書きましたけれども、こういうふうに額が小さくてお願いがしにくい、スタッフができないところをお願いしている現状ではあるんですが、一方で教育歴として TA の場合は書けるということも現状としてはあると思います。ただそれに対してもアメリカの TA の制度とは全く違ってまして、額がすごく小さいので、例えば授業がいくら基礎的な科目であっても、そのまま任せることは実際してないわけですので、教育歴として書けるということを知らない TA もたくさんいますし、そこを教育歴として履歴書に書けるものであるならばそういった制度としてきちんと確立させていかないと個人的には思っています。それだけの資金的な裏づけにプラスして職務内容を、今回がそういう機会になったと思うんですけども、どんな職務を TA に任せるのがいいのかとか、どういう制度としてやるべきなのか、などの共通認識を、ある程度個々の事例によって活用の仕方は違うとは思いますが、その共通認識を作っていく必要があるのではないかなと個人的には思っています。以上です。

司会：宮地さんどうもありがとうございます。またコメントは後で一括してフライ先生からうかがうこととして、つづいて考古学の講師の梶原さんをお願いしたいと思います。

梶原：考古学の梶原です。宜しくお願いします。私はまだ教歴が浅くて、TA を使ったというよりは TA として使われたという年数の方が長く、このような場でお話しするのはおこがましいんですけども、今日はフィールド系の話をしてほしいということでしたので、ひとつ私の方からお話しさせていただきます。宜しくお願いします。

考古学の講座では、2年生3年生向けの授業として考古学実習というものを設けております。今日はこの考古学実習の授業についてのお話をさせていただきます。考古学実習なんですけれども、フィールドを基本



とする考古学という学問の習得にあたりましては、考古学実習というものは、他の授業と比べましても、一番大事な授業として、考古学の授業では位置づけております。考古学講座では、私が3年前に

着任したときには、実習の授業に TA を参加させておりました。しかし、現在では少なくともこの実習の授業には TA を使用しておりません。授業補助として、先ほども宮地先生からお話がありましたような資料の作成とかで TA を使用しておりますけれども、実習の授業中には TA を使用しておりません。ですので、TA を使用していた当時の状況を中心に、現在では恥ずかしながら TA を積極的に活用しているとはいえないということで、事例報告というよりもむしろ反省の方が多いんですけども、この現状について私の考えをお話いたします。

まず考古学実習とは、ということで、考古学実習の授業についてお話をさせていただこうと思います。この授業は考古学の発掘現場および遺物の整理作業において必要最小限、あえて必要最小限と書きましたけれども、必要最小限のスキルを習得するための授業として行っております。前期は野外での発掘調査に必要な技術を学び、そこでは主に遺跡の測量に関しての技術を学ぶということを行っております。例えば平板測量法という測量法でありますとか、レベルという高さを測る機械がありますが、測量におけるそのような機材の使用法。また考古学の図面として土層の断面図を作成する方法などを教えております。これが先ほどお話しました平板というものですけれども、このような形で、これはその表のグリーンベルトですが、このようなところで平板測量の実習を行っております。こんな感じですね。ここに平板があって、ここにポールを立てて、この距離を測っていると、このようなことを行っているわけです。ここで腕をくんでいるのが、TA の大学院生になります。実際にこうやって作業をしているのは2年生です。最後はこのような図面ができるというお話だったんですけども、ちょっとごめんなさい、図面が薄くなってしまいました。実習における TA の役割ということについては、2年生、3年生合わせて十数人おりますので、それを3つか4つの班に分けて実習を行っております。まず、私から全

体的な説明を行った後、各班にひとりずつ TA を配します。機材の取り扱いや図面の書き方などについて、直接指導指示するのが TA の役割ということになります。教員は3つか4つに分かれた各班を巡回して、大きな指導を行うということをやっております。実際のところ、本研究室は院生数が非常に少のうございまして、3, 4 班に院生を配せないということも多々ありまして、その班は教員が重点的に指導するということを行っております。

TA の効果ですけれども、各班に専属の大学院生をつけるということで、表のグリーンベルト全体とかです、キャンパスの半分を使うということで、非常に広い範囲で実習を行っております。そういう広い実習においてきめ細かな指導と対応が可能になるというメリットが確かにございます。しかし学生にとってその程度でしたら、正直、私と山本先生とでできないことはなく、むしろ学生というよりも院生にとっての教育という側面が非常に強いと私は考えております。考古学の中でも図面をとるとか、測量を行うとか先ほどもお話ししたとおり非常に徒弟制的な部分の強いところがございまして、学生に指示を出すことによって、自分の知識や技術を再確認することが可能であるということでございます。実際の発掘現場の運営においても、大学院生というのは自分の与えられたところ、与えられた仕事だけをやるのではなくて、できるだけ現場全体、それこそ何平米もある現場を広範に把握して、そこで主導的に学生に指示を出して動かしていくことが実際の発掘現場では大事になります。教員が一番トップにいるなら、その教員の下に院生がいて、その院生の下で学生が動くというそのような一種のヒエラルキー的といっているかわかりませんが、そのような体制というのが現場では非常に必要となってきます。その現場でうまくやっていく訓練としての実習の意義は、院生にとっても大きいのではないかな、と。一番下で作業する学生というよりは、むしろ間にたって学生を指導していくという意味で院生にとっての意義は非常に大きいのではないかなと思います。しかし、ちゃんとその仕組みが稼動していれば有効な使い方ができるのではないかなと思いますが、現状としてはそううまくはいかなかったもので、実際、今は使っていないわけです。

そこで、どのような理由のせいでうまくいかなかったのか、ということについて少しお話をさせていただきますけれども、まずひとつには、名古屋大学だけではなく他の大学から来る院生が増えてきて、院生が必

ずしも学生に指示を出せるだけの技量を持っているとは限らなくなってきました。技術の上達というのは必ずしも年数に比例しないわけで、勘のいい学生はどんどんうまくなるし、勘の悪い学生はうまくなならないということがございます。それでもある程度、私たちが学生の頃とってしまっはあまりよくないかもしれませんが、私たちが学生の頃は、考古学実習というのは基本的なことを学ぶ、最低限のスキルを学ぶということをお話ししましたけれども、週に1時間とか2時間の実習では本当に基礎の基礎しかできないわけです。それ以外はどうかというと、われわれが学生の頃は、1年に何ヶ月も発掘現場に張り付いて実際に調査を行う、そういうことによってスキルを磨いていった、技術を向上させていったわけでございます。しかしながら現在は、必ずしもそういう発掘現場に長いこと出ていない人が大学院生として入ってくるようになった。すると、スキルも非常に低いわけで、下手をしたら院生よりも学生の方がうまい図面を書くというのもめずらしくないという状況がございます。そのような状態で院生を実習に参加させても、学生の方が図面がうまくて院生の方が図面が下手ということが実際生じてきて、学生の指導にも良くない、院生のプライドを考えても良くない、というような困った状況が生じてきていることが、ひとつ現状としてございます。とてもじゃないけど、TA とは言えないという状況ですね。

また、これはよし悪しではありませんが、院生の出身校の多様化によって、機材の取り扱いとか、諸手順の細部が異なるという事態も生じてまいりました。こういう調査機材の扱いは、最終的には正確な図面が書ければそれでいいわけで、そこにいたる細かい機材の使い方とかには担当教員が10人いたら10人、現場担当者が10人いたら10人、それぞれ違いが細かくあるわけでございます。実際、私がここに着任したときにも、山本先生と、当時は助手が研究室に付属しておりましたので助手の伊藤先生と、私との間でやり方が違ってどうしようかと思ったこともございました。TA を使うにあたっては、これらをまず統一しておかないと教える院生も教えられる学生も迷ってしまうということが現実としてございます。

これらの諸問題を克服するにあたっては、授業を行う前に TA に対する綿密な事前講習による技術向上と指導法の統一が必要になってくる。そもそも院生のスキルが低いという話を申し上げましたけれども、こういうことに関しましては、かなり長い時間をかけてス

キルを上げてやらなければ教える段階に達することができないというのが現状です。学生を教えるよりも院生を教えるほうがより手間がかかるというのが現実ですから、TAとして使うにあたっての講習をするよりは、むしろ院生への授業の一環として指導を行ったほうがいいんじゃないか、または授業の一環としてではなくても授業外に院生を指導するという形で行われるべきではないかとも思われます。少なくとも学生にものを教えるだけの技量にまで院生をもっていかうと思ったら、TAとして年額何万円ですかね、私も忘れてしまいましたけれども、それぐらいで院生を拘束できる時間を簡単に超えてしまうのではないかと思うわけでございます。

とはいえ、TAとして学生を指導させることによる教育効果、先ほどお話ししましたことですが、これはやはり無視できないと考えております。また、将来的に考古学では、発掘調査とか測量調査をおこなっていかねばならないと考えていますが、それにあたっては院生の技量低下というのは非常に重大な問題です。TAの制度も含めまして、院生をどのように活かしていくかという点は私も非常に興味をもっている問題でありまして、そういうことを解決するにあたって、TAという制度をどううまく使っていけるかということに、かなり興味をもっているところではございます。

あと、付け足し的な話ですけども、考古学の方では実習の授業にTAを複数つけていたという話をしましたけれども、確か制度的にはそれは本来できなかったような気がするんですけども、実際の運用としてはそのような形でやらざるを得ないようなことがございまして、そのへんも含めまして弾力的な運用ができればな、と考えております。以上で私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会：梶原さん、どうもありがとうございました。最後に、哲学の金山さんからお話を頂こうと思えます。金山先生は英語のハンドアウトを用意されていますので、そちらをご参照ください。

金山：私の話は英語のハンドアウトにまとめてあり、フライ先生もお持ちですので、日本語で説明いたします。私は名古屋大学に来てから15年になるんですけども、それまでは助手でした。助手をやめるときにひとつ先生からほめられまして、本当に褒め言葉になるかどうかかわからないんですけども、「あなたは非常に優秀な助手だった」といわれました。その助手精神が今でも引き続いています。ですから実際のと



ころ最初に書きましたとおり、私に来たときにはこちらにも助手がいたんですが、助手がなくなるとともにTAが始まった。そこで、TAが始まることによって私の「助手」の仕事が減るかと思っただ

減らないで、どんどん余計増えていったというような印象がございまして。

先ほどフライ先生がTAのabuseとgooduseということについておっしゃいましたが、アメリカで本当にgooduseになっているものを日本で応用したときにabuseとされるんじゃないかという恐れを感じながらお話を聞きました。例えばこれは是非やってみたいことだなと思うんですけども、海外出張のときなどにTAに授業をやっておいてと、頼めないものかなと思います。頼んでいけなくもないかもしれないけれども、これをやりだしたら授業アンケートで悪くなるだろうなと。それから、授業の成績をつけるのもTAに頼んでもいいかなと思うのですが、それでまた成績評価の評価が悪くなるだろうなと、そういう恐れを感じております。しかしTAという制度がある以上、少なくとも目標もあるんですけども、そこからできるだけ被害を招かないような方向もやはり考えるべきかなというふうに思っております。

それでTAのことを考えます場合に、フライ先生からいろいろお話をいただいて私が色々疑問に思っているところを非常にうまく答えてくださって非常に感謝しておりますけれども、現場での実際の状況において、それをうまく按配していくのはやはり難しいかなという気もしています。一番最初に書きましたけれども、トリレンマ、要するに教師、学生、TAのどちらを重んじるか、教師のティーチングのためのアシスタントか、学生のラーニングのためのアシスタントなのか、TA自身のための自己訓練とか、あるいはジョブ・ハンティング、就職のための業績作りがTAの目的なのかという問題です。しかしフライ先生はTAがティーチングにおいてgood teacherとなること、ティーチングの質を高めるのが大事だとおっしゃった。やはりそれが一番大切なかなと思っています。しかしそれだけではTA自身の資質、それから学生の期待度なんかも考えますと、ティーチングの質を高めようとして、しかもTAを使おうとすれば、われわれの負担が

増えてくる。それでは、やはりちょっと考えざるをえません。それと同時に TA の給料、本当に授業料がタダになったらいんですけれども、そういうことのない状況で、どれだけの仕事を TA に任せてしかも TA との間の関係を保っていくか、また他の学生との関係を保っていくか、ある種綱渡り的な作業を強いられているわけです。ともかくできるだけ多くの人たち、われわれみんながハッピーになるような仕方が求められているわけですから。

現在のところ私は、TA については学生にメールで希望を出すように伝えまして、そしてできるだけ早く出すように、早いもの順と適材適所ということを考えながら、学生の出してきた返事を基にして、「ごめんここはこの人がいいと思うからやってもらえないか」と色々頼みながら TA を割り当てているわけです。そして具体的に言いますと、4つの授業のタイプがあります。ひとつは概論、それからひとつはセミナー形式で、特殊研究もかねたような講義もしながらのタイプ、それからもうひとつは哲学セミナーといたしまして、山田先生と一緒にやっていたセミナー、そして最後は共通教育のものでして、これは去年は幸いにして免れることができましたけれども、その前の年は基礎セミナー、来年は「生と死の人間学」をやることになっています。実際に TA に何を頼むか、それから TA との関係で私がどういうふうに心がけているか、それからうまくいったなと思う面と、ちょっとどうかなと思う面と、来年に向けてどのようにしようかなと思う面を簡単にお話ししたいと思います。

概論形式の授業では、ともかく授業の素材をコピーしてもらおうこと、そしてそれを授業の前に配ってもらうことと、ただこれもなかなか前日にコピーできればいいんですけれども、本当に授業の直前まで準備をしているという感じですので、ぎりぎりになって渡すという感じになります。それから、私は授業で最後の5分くらいを使って学生たちにマメアンケートとかマメレポートとかを書かせております。それを出欠に使うと同時に、意見とか質問を書かせてそれを次の授業に用いるわけですが、そのときに学生の出欠をみるのだけでも結構時間がかかるんですね。出欠のチェックは TA に任せて、本当ならその答えも TA に準備してもらえたらなとは思いますが、しかし、やはりそこまではできないなという感じですね。学生がどういう質問を書いているのかというのを見ながら、自分で次の授業はこういうふうを始めようかと考え、そしてここからこういうふうにもってき

て、次のところにイントロとしてもっていこうというように組み立てていきますから、やはり学生の質問に TA に答えてもらうことはできないなという感じはいたしております。それからもうひとつ大事なのは、TA がそこにおいて、自分の授業を聞いてくれていること、これはやはり自分にとっては大切なことだと思います。なぜかと言いますと、後にも申し上げますけれども、4コマ目の授業だと非常に学生が眠くなっていくんですね。そしてウトウトします。それで、そういうときに TA をみると、TA は一生懸命起きて聞いている。それは私にとってありがたい。TA が聞いていることはとてもありがたいです。それとの関係で、授業のときに私が心がけていることは、ともかく概論にわざわざ来てくれているんだから、TA にも役に立つこと、TA にも参考になること、それであまり難しくならないけれども、しかし、何かそういう内容を話すように心がけております。それから、課題としては、TA に質問用紙を集めてもらったために、自分が集めれば、集めながらこの人はこういう名前だな、というのを確認できるんですが、それができなかったから名前が覚えられなかったということがあります。また、もっと TA に何らかの形で質問に答える機会を作るべきだったかなとは思っています。そんな感じで、来期は TA に最初に出欠をとらせながら私が名前を確認する作業をやってみよう、それから Eメールでの TA への質問も進めてみようかなと思っています。

セミナー形式の授業では、学生がテキストを訳してから色々説明するわけですが、学生に本当であればその場であてて訳させたほうがいいんですけれども、最近だとそれでは授業が進まなくなってしまいます。そこであらかじめ学生たちに訳す箇所を割り当ててありますけれども、最近の学生は自分が当てられているながら来ないことがあるんですね。そういうときに今度は TA に訳させる。場合によっては TA が連続して訳さなければならないことも生じてきます。そういう場合、TA の質が問題になってきます。非常にいい TA であればどんどん進んでいく。ところが悪い TA の場合には、何かモタモタしたり、ちょっと困ることがあるんです。来年は、TA に対して、学生のモデルになるようにということを最初にきちっと言っておかなければいけないなと思っています。学生も良く見ていますから、反面教師は反面教師で、なかなか勉強になるところもあるんですけれども、そんなこんなです。

最後に基礎セミナーですが、昨年の場合、幸いにも本来の TA に加えて、もうひとり TA になってくれた

学生がいて、2人のTAを使うことができました。学生が12人の授業なんですけれども、3つのグループに分かれて、それぞれに1人ずつ、私と2人のTAがついてスモールディスカッションを行って、それから最後の全体ディスカッションに加わるという形でやることができました。TAが非常に議論を活発にしてくれたし、最初に自分たちが手本を見せるといってくれたんですね。そして、発表の手本をみせてくれたりしました。それから共通教育棟に通うときに、ここはこういうふうにしたらいんじゃないですか、などと色々サジェストしてくれてありがたかったです。特にTAがいるおかげで1年生たちが非常にリラックスして、今でも1年生に会うと、TAだった人は今どうしていますかと声をかけてくれます。来年もそういうふうな感じになっていくのかなという気はしていますけれども、しかしもうちょっとできるだけ、自分の仕事を減らしながらティーチングの質を高めていくような形で何かサジェスチョンがいただけたらありがたいと思います。以上です。

司会：金山先生ありがとうございました。以上、日本語学の宮地さん、考古学の梶原さん、そして哲学の金山さんから事例報告をしていただきました。先ほどお話ししましたように、フライ先生には事前にご質問からの質問をお渡ししてあります。ということで、フライ先生に、今の報告を聞いたうえでの感想およびコメント等をいただければと思います。宜しく願います。

フライ：名古屋大学においてどのようにTAを使っているかという点について実際の事例をご紹介いただき、ありがとうございました。とくに、TAが教員と一緒に授業をすることによって発表の仕方を学ぶことは大切で、そしてこれが実際に教授になった時にとっても役に立つと思います。それは他の仕事でも役に立つと思います。私は年に数回アメリカで国際学会に参加しますが、発表の仕方の拙劣さにはいらいらさせられます。ですから、優れた教員になるためにも、学会で上手に報告するためにも、TAが発表技術を磨くことはとても大事だと思います。TAにセミナーでの討論をリードさせるというのも、学生をリラックスさせる効果があって、非常に有効です。確かなつまらない仕事をさせなければならぬこともあります。これはもう仕方のないことですので、受け入れるしかありません。しかしながら、このようなつまらない仕事を、事務的な仕事をできるだけ少なくすること、そういう努力をすることが必要です。そうすることによってTA

がより意味のある仕事をできるようにさせてやる必要があると思います。ちょっとはつきりしなかった点があるんですけれども、日本語学の授業について、クラスの規模と、何人のTAがいるかということですが、そもそもTAを持たなければいけないかどうかは、教授が決めるのですか。

宮地：教授が決めることはできません。まず、クラスのサイズなんですけれども、お話しした演習では10人～20人です。あるクラスにTAを何人配置するかということに関しては、制度上1クラスに1名という約束がいちおう文学研究科にあって、もちろん運用はそれぞれの先生や研究室に任されていると思いますけれども、ひとつの授業にTAを1人お願いしているのが現状です。

フライ：ということは、学生が10人でもTAを雇用できるのですか。あるいは15人いればTAを使うことができるのですか。

宮地：クラスとして運営されていればというんでしょうか、科目が設定されていれば、何人の学生の授業でも、例えば3人とか5人の受講生のクラスでもTAを1人付けることが今の制度上はできますよね。確認ですけれども。

フライ：それはすごい。

宮地：ただ、50人や100人のクラスでも基準は1人です。それは講義であろうともセミナーであろうとも基準は1人という現状だと……。違いますか。その運用に関しては割と先生方が必要に応じて工夫されてると思うんですけれども……。許されていないわけではないと思います。

フライ：たぶん、これはアメリカの不平等に対する日本的な平等の好例かなと思います。アメリカでは、私の大学ですと、10人、15人、20人というクラスなら、TAをつけることはできません。より大人数のクラスの場合にのみ、TAが使えるのです。そもそも私の大学の場合、10人以下しか学生が来なければ、その授業は開講されません。10人以下の学生を教えることは許されていないのです。ところが日本では、個人指導のような授業さえ見たことがあります。

ところで、100人、200人、あるいは75人の学生、そういったクラスの場合でも、ディスカッションの時間はありますか。というのも、1クラスに100人ぐらい学生がいると、ディスカッションの機会がなかなかないわけです。そこで、ディスカッション・セッションのときにTAがディスカッションの指示をするということは考えてもいいと思います。逆に、もし10人

しか学生がいない場合には、TAにとって意味のある役割というのは、なかなかみつけにくいわけです。ですから、人数に応じたTAの数の割り振りが肝心ではないでしょうか。

鳥居：ディスカッション・セッションというのはアメリカ固有の制度だと思いますので、ちょっと補足させていただきます。フライ先生がおっしゃっているディスカッション・セッションというのは、通常例えば1週間に1回の講義、ビッグレクチャーがあるとする、1回か2回、講義の時間とは別枠で設けられるディスカッションの時間があります。それは例えば、200人、300人規模の講義でしたら、TAやティーチング・フェローが3人とか4人とか配置されまして、それぞれのTAが20名ぐらいのsmallグループを担当するわけです。そこで、ハーバードの場合は1時間ぐらいだったと思いますけれども、ひとつのテーマに即してじっくりとディスカッションするという時間を週に何度か取るわけです。それは、同時並行で進行している場合もありますし、ティーチング・フェローが都合のいい時間に設定するという、非常に柔軟な扱われ方がされています。それに対して、プロフェッサーとかインストラクターは一切タッチしないということになっていますので、TAの責任というのが非常に重要になってまいりますし、そのディスカッション・セッションの成績評価に関してもティーチングアシスタントがやるという大学もごございます。おそらくフライ先生がおっしゃっているのはそのディスカッション・セッションのことだと思いますので、ちょっと補足させていただきました。

フライ：その通りです。100人のクラスの場合、例えば20人ずつ5つのグループに分かれるとして、全体に2人のTAが配属されます。1人あたり、2つか3つのグループを担当するわけです。クラスが200人だとしたら、4人から5人のTAがつきます。オレゴン大学での私の同僚に、ロバート・プラウドフットという素晴らしい教授がいました。教育に関していくつもの賞をとった人で、私はとても尊敬しています。彼は、大学院生がボランティアでTAをすることを認めていました。院生たちは、この偉大な教授から学ぶために、無給でTAを務めようとしていたのです。彼は、オレゴン大学の教授でただ1人、学部教育でも大学院教育でも賞をとった人でした。彼はとても有名だったのでたくさんの学生が授業に詰めかけていましたが、ディスカッション・セッションはとても効果的に運営されていました。



もう少しだけ事例報告にコメントしてから、自由な意見交換に移りたいと思います。考古学の例はとても有益でした。というのも、私のプレゼンテーションでは、考古学のような、実践的な技術を教えるのに多くの労力が必要となる分野でのTAの有用性が強調されていなかったからです。機器類の使用に習熟しなければいけない分野では、TAは特に役に立ちます。また、アメリカでは決して一般的ではないと思いますが、とても興味深くうかがったのは、皆さんの多くがTAは学部生の模範になりうるのだと考えていることです。日本の学部教育のかかえている問題を考えると、そのような役割をTAが果たすことができれば、それは素晴らしいと思います。

金山先生が指摘されたように、学生の名前を覚えるということも大事ですね。ですから、TAを使うことによって教員としての重要な役割を失う心配があることにも注意しなければなりません。私は、幸いにもハーバード大学のケネディスクールで国際関係論の教育についての素晴らしいプログラムに参加したことがあるのですが、そこでは、プログラムの主宰者であるバイアー教授が、どんなに大きなクラスであっても教授は学生の名前を覚えなければいけないと主張されていました。そこで、ミネソタ大学の教室の授業でも、私はできるだけ早くたくさんの学生の名前を覚えるよう努力しています。その役割をTAがやってしまうと、教授と学生間に距離ができてしまいます。いくら優秀なTAがいたとしても、学生と私たちの関係は近いほうがいいわけです。TAが代わりになることはできません。これは非常に大切なことです。

TAに出欠の確認をさせるということにも触れられていましたが、これは、大学生は大人なのか、それとも彼らを高校生のように扱うべきか、という複雑な問題と関連してきます。私はこれまでの40年の経験の中で、一度も出欠を取ったことがありません。まあ、こ

これは私個人のスタイルではあるのですが。もし学生が来ないというのであれば、彼らは授業料を払っているのですから、自らの責任でそうしているわけです。一方で、私の責任は、彼らが来たいと思うような魅力的な授業をすることにあります。出欠を取ることで無理矢理クラスに来させようとは思いません。しかし、これは皆さん次第です。もちろん、TAに出欠をとらせることはできます。つまらない仕事ですが、出欠を取ることに私たちの貴重な時間を使わなくて済みます。

皆さんのお話を通じて、名古屋大学にはたくさんの可能性があることが分かりました。皆さんは、TAの使用法についてさまざまな事例をお持ちですし、大学院生にTAを経験させる予算も十分にあるようです。鍵となるのは、効果的な方法を発見することにあるのではないのでしょうか。金山先生が指摘されたように、TAが名古屋大学の学部教育をさらによくすること、学部生たちがさらに良い教育を受けられること、そして大学院生がTAを経験することによってすばらしい先生になることが大切な点です。最初にお釈迦様の話をしましたけれども、私の発表に対して、変だなとか、不適切だと感じたり、日本の状況にはふさわしくないと思ったりしたことがあれば、どうぞ遠慮なくご指摘ください。

司会：そもそも授業の設計そのものが全然違うという感じですね。日本の場合には、大教室の講義では、形式的に質問を募ったりすることはあっても、基本的には一方的な授業であって、ディスカッションを前提にはしていません。それでも、大教室の授業でもTAがつくとはいえつくんですよ。そうなったときに、どういう形で利用していったらいいのかという、たぶんそういう問題になっていくんじゃないかと思います。ですから、TAのペイのこともそうですけれども、やはり基本となる仕組みが違うので、そのままでは応用できないなということはたくさんあると思うんですけども、一方で、やはり今日のフライ先生の講演の中で、我々にとって制度が違って共通する問題と言えるようなものがあつたことは確かだと思います。時間がそれほどないんですけども、初めにお約束したとおり、皆さんからの質問等を受け付けたいと思います。特に、たくさんのパワーポイントを用意していただいたにもかかわらず、先生が時間の関係で十分にお話にならなかった論点や、スキップされたトピックもいくつかあつたかと思います。そういう点も含めてぜひ質問をフライ先生に寄せていただければと思います。いかがでしょう。

金山：フライ先生の今のお話を聞いていまして、ディスカッション・セクションというのは非常に魅力的だなと私自身は思いました。つまり、もしも10人程度のセミナーでTAがいらないとしたら、そうすると学生にTAの機会が少なくなるわけだから、その分、私の講義の授業でTAが2人か3人いてくれたら、ありがたいな、そして1回授業をやっておいて、2回目と3回目はTAに任せてディスカッションでやっていたらありがたいなという気がいたしました。まあ、それができるかどうかはともかくとして、参考になりました。

司会：どうぞ他にも質問をいただきたいと思いますが、いかがですか。それでは、若尾先生お願いします。

若尾：TAの給与の問題、報酬の問題が出ていましたが、鳥居先生は日本円に換算して80万円くらいという、ちょっと我々にしては想像を絶するような額をおっしゃっていましたが、我々の場合は30時間で3万6千円から3万9千円という額ですよ。アメリカの場合どういう単価計算になっているのか。1時間にいくらで、予習用の時間数も勘案されているのか、額が大体どれくらいか教えていただければと思います。

フライ：フルタイムですと20時間、そしてパートタイムだと10時間を1週間で担当することになります。これは総時間です。つまり、もし週に4時間の授業をしている場合に、週10時間のパートタイムのTAがつくと、授業に出席しているだけでこのTAは40%の時間を使ってしまうことになります。授業への準備、ディスカッション・セクション、そして、そのディスカッション・セクションの準備も含めて、1週間に10時間がパートタイム、20時間がフルタイムのTAの勤務時間です。あるクラスで、私は1人の学生と学期中に294通のメールを交換しました。30人の学生がいるクラスで、1人の学生に対してだけで294通ですよ。これがどれほど大変か、よく分かると思います。ですから、学生とのコミュニケーションも、TAが果たすことのできる大きな役割なのです。多くの学生がいる場合、TAはコミュニケーションの円滑化を支援することができます。しかし、小さなクラスでTAを持つということは、率直に言ってとても贅沢なことです。アメリカのほとんどの大学では、そのようなことは不可能です。質の高いインターアクティブな関係を持つことが重要であり、そのために大きなクラスでこそ学生と緊密な関係を築くためにTAが期待されているのです。もちろん、言語教育の場合は話が別です。

どの言語の場合でも、言語教育は少人数で行われなくてはなりません。他に質問はありますか。

山田：宮地先生がおっしゃられたように、TAの職務内容というのは大変重要なことだと思います。フライ先生からは、大学によってはTAがクラスを教えている、TAが実際にそのクラスを担当して単位を認定するというお話がありました。その具体的な内容を聞きたいんですが。例えば、中国人のTAが中国語を教える、これは可能だと思います。しかし、物理学を教えるというのはちょっと難しいかなと思うんですが。そこで、TAが授業を担当するという点について、具体的な内容を教えていただければと思います。

フライ：とても良い質問です。梶原先生が考古学の話をなさった時に、TAは技術を持っていないかならなとおっしゃいました。そうでないと、教育の質が劣化するというお話でしたね。TAが中国語を教える、あるいは考古学や統計学、物理学を教える、そういった場合には、その分野を知っている必要があります。でなければその役割を果たすことはできません。プラウドフッド先生がボランティアのTAを認めていたという話をしましたが、先生はTAの質には留意されていました。適切な技量を持っていないと、TAの役割を果たすことはできないからです。言語教育について言えば、オレゴン大学では、留学生の大学院生がベトナム語を教えたり、インドネシア語、ビルマ語、フィリピン語を教えたりしていますが、いずれも素晴らしい授業です。

佐久間：TAの経験というのは確かに履歴書に書けるわけですが、教育に係わっているという自覚がTAにどれくらいあるかという点、あまり現状ではないのではないかという気もするんですね。あと、梶原先生から、スキルを教えるにしても、そもそも大学院生だからといってスキルが備わっているとは限らないという話もありましたが、もしそういうTAというものを考えたときに、どうやって教育に係わっているという自覚をもってもらえるのか、あるいは、スキルそのものの向上を図ることができるのか、そこらへんをちょっと考えなければいけないと思うんですが、何かよいアイデアがあれば教えて頂きたいと思います。フライ先生、できましたら鳥居先生にも、もしよいアイデアがあれば伺いたいと思うんですが、宜しくお願い致します。

フライ：非常に重要なご指摘ですね。先生方は、今のご意見についてどうお考えですか。私としては、そのような状況だからこそ、将来教員になることを志望

してTAを務めるすべての大学院生を対象とする特別な学際セミナーを開催するべきだと考えます。1人の教員だけに負荷がかからないように教員がチームを組んで組織することでこのセミナーを成功させることができるならば、大学院生たちの意欲は飛躍的に高まるでしょう。逆に、もし、このようなセミナーを行わないならば、大学院生の技量の向上は個々の教員次第ということになってしまいます。

鳥居：ティーチングアシスタントを務める大学院生に対してどうやって教育に係わっていく自覚を持たせるかという点について少し補足をさせていただきたいのですが、これはやはり大学院生も学んでいる途中の学習者でありますので、なんらかの教育的な働きかけとその機会を提供しないといけないというふう考えております。実は、私どもの高等教育研究センターのほうで、一昨年度から短い時間なんですけれども、大学院生を対象にした研修のワークショップを提供しております。ちょっと宣伝が非常に微力なものですから、先生方の目には触れなかったのかもしれないんですけれども、昨年も9月と11月に2日間取りまして、シラバスの書き方、それから初回の授業のアイスブレイキングの方法などですね、基本的な教授法にあたるような事柄をワークショップとして提供しております。実は来てくださった大学院生の方はほとんどが言語系の科目の大学院生の方でした。留学生の方が多かったんですけれども、やはり留学生であるというディスプレイアドバンテージもご本人たちは感じていらっしゃるということ、具体的に学生さんにわかるように教えるにはどうしたらいいかという共通の課題もたくさんあると思いますので、そういう事柄はやはり我々のようなセンターですとか全学の組織がなんとかして汲み取って、共通したプログラムを先生方に提供していくというのが一方で必要かと思えます。もう一方で、やはり考古学ですとか、フィールドのように、その領域固有の教授法というものがどうしてもあると思いますので、そういうものをやはり研究室単位で伝承していくなり、継承していくといった2つの方向が必要かなと思われま。

司会：もう予定の時刻になっていますが、どうしても伺いたいということがもしありましたら、1つ2つはお受けしたいと思います、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

吉武：2つ伺いたいことがあります。1つは先ほどの話の中で、スーパーヴィジョンという言葉がフライ先生のお話から出てきましたけれども、それはプロフ

エッサーがTAに対して行う指導のことだと思います。これは非常に重要な要素だと思います。つまり、教わる学部学生のいないところで、TAに対して直接プロフェッサーがスーパーヴィジョンをする、そして、このTAのティーチングの内容を監督するという、これは重要なことだと思うんですが、そのために費やされるべき時間というのは、どれくらい必要だとお考えになりますか。それからもうひとつの質問ですけれども、これは全く別の話ですが、我が文学研究科では、おそらくTAを実際にはチューターとして、つまり個人指導の時間に使うという形もけっこうあると思うんです。そういう場合には、私の記憶としてはチューターという名前が使われるんじゃないかと思うのですが、フライ先生のお話の中ではチューターという言葉は出てきませんでした。TAとこの個人指導を行うチューターあるいはその名前はどうでもいいですけれども、個人指導を行う業務というのはアメリカの大学では別のものとして定まっているのでしょうか。

フライ：教授がスーパーバイズすることの重要性についてですが、私もまったく同感です。これは、徳川時代の、あるいは孔子の理想である徒弟制度に戻ることです。TAの教育はとても大事ではあるけれども、同時に非常に時間を要する仕事だということ、多くの方が今日おっしゃった通りです。でも、私自身のケースを振り返って考えるならば、これはある種の相互利益として理解されるかもしれません。私は、大学院生が成長するように時間を費やします。けれども、よいTAが育てば、見返りとして私の仕事を助けてくれ、結果として私の仕事もよくなるのです。私たちが彼らを助け、彼らが私たちを助けるというわけです。チュートリングについてもご指摘いただき、ありがとうございました。1つ、質問をしてもよろしいでしょうか。私は、TAがアラビア語や中国語、それに大学では教えていない言語についてチュートリングをしているという事例をお話ししました。日本では、そのようなことは可能でしょうか。そもそも、どのような学生に対して、チュートリングをするのでしょうか。授業についていけない学生に対してでしょうか。アメリカでは、一般に学生個人に対してチュートリングをすることはありません。そのためのセンターはありますが、言語教育の場合を別として、TAがチュートリングをする余裕はないと思います。

吉武：日本では、特に基準とかはないままやっていると。基本的に、文学部ではTAをどうふうに使わなければならないというガイドラインはな

いに等しいと思いますが。チュートリングが問題になるのは、海外からの学生でコミュニケーション能力に乏しい場合ではないでしょうか。1人に対して教えるという場合には、例えば留学生が日本語の力が劣るとかですね、そういう場合が多くて、日本人の学生の学力が劣っているからチューターをあてるということは、たぶんあんまりないと思うんですけどね。だいたい傾向としてはそんなところだろうと思います。具体的に私のところでは、ギリシャ語やラテン語を教えるときに出来の悪い学生に対して補習をしたり、セミナーで発表があたっている学生に対して発表の準備のサポートをするようなことをお願いしています。

フライ：今の情報は非常に役に立つ情報です。ありがとうございます。名古屋大学には色々な国からたくさんの方が来ていて、非常に感銘を受けました。モンゴル、キルギスタン、ウズベキスタンなどからの学生もいますので、彼らに対する援助にTAを使うのは、適切な使い方だと思います。それもまた将来教員になる者が身を置かなければならない役割だと思います。TAの限られた財源をどのように配分するかは、非常に難しい問題です。日本では平等性というものを重要視しますから、アメリカにはない問題もいろいろあるかと思っています。

司会：時間のほうも予定の時刻を過ぎていますので、最後に評議員の和田先生に結びのご挨拶をお願いします。

和田：フライ先生、鳥居先生、本当にお忙しい中を今日は私たちのために来ていただきましてありがとうございます。貴重なご意見を伺いました。私たちはTAを使っておりますけれども、普段意識できないことをお二人から指摘を受けまして、改めてTAをうまく使っていかななくてはいけない、それが私たちの責任だということを改めて感じさせられました。ありがとうございます。それから、今日私たちの同僚の中から、宮地先生、梶原先生、金山先生には、あまりみなさんの前でお話ししたくないこともあったかと思いますが、正直にご報告いただきまして、色々問題点も言っていたいただきまして、大変勉強になりました。ほんとうにお三方ありがとうございます。今日は短い時間ではありましたが、有意義な時間を過ごせたと思っています。すみません、私も同時通訳に合わせてゆっくりしゃべるようになってしまいました。これで終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

フライ：今日は本当にありがとうございました。